
ねくら

名無しの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねくら

【Nコード】

N7255Z

【作者名】

名無しの

【あらすじ】

夏休みが明け、様変わりしたクラスメイトと相反して、負の観念に憑かれた少年、霧崎刑は、突然襲ってくる頭痛に悩まされながら、周りとは噛み合わない毎日を怠惰に過ごしていた。彼は永々とも思える時間を、自身の過去から逃げる様に、他愛も無い空想に費やしていた。文化祭が近づき、活気つくクラスであったが、相変わらず校内で嫌われている存在の少年には、居場所などあるはずも無かった。居心地の悪さを感じた少年は、いつもの様に授業を抜け出し、下らない妄想に耽ようと古びた資料室へ向かう。そこで少年は、一人の

少女に出会う……。

終わりの少年

《ねくら》

無かった。

僕には何もなかった。

僕は笑わなかった。

僕は泣かなかった。

僕は悲しまなかった。

僕は楽しくなかった。

僕は嬉しくなかった。

僕は憐れまなかった。

僕は悔しくなかった。

たくさん持っていないものがあつたから。

酷いことをしても。

酷いことをされても。

何も思わなかった。

何も感じなかった。

僕には表情が無い。

僕にはココロがない。

僕には何も無い。

僕は空っぽだ。

虚しい。

僕は生きてるのか。

僕は死んでいるのだろう。

何も感じないから。

なにも見えないから。

ここはとても暗くて、寒い。

ここには何も無いし、終わりが無い。

何時まで経っても終わらない。
何処まで行っても終わらない。

一生続くのだろう。

僕は逃げられない。

これが僕の全てだ。

この暗闇が。

ただそれだけが。

僕は欲しい。

ココロが欲しい。

あの子の様な。

暖かくて優しい。

ココロが欲しい。

僕には無いから。

僕は持っていないから。

だから、僕にはあの子が必要だった。

ロープ

絶望的な痛みのは、去っていった。

だけど、未だ、耳鳴りと頭痛が酷い。

神経は鈍り、頭はまるで鉛の塊の様に重たい。

この痛みは、吐き気すら催す痛みだ。

それに、全身が、震えている。

視界は真っ暗だ。

呼吸はだいぶ落ち着いたけど、まだ荒い。

今回は、本当に、運が無かった。

まさか、このタイミングであれが来るとは、思いもしなかった。

だから、なんの準備もしていなかった。

それでも、この失敗は、完璧に、僕のミスだ。

全く、毎回毎回こうも失敗ばかりしているとさすがに嫌気がさし

てくる。

こうまで失敗が積み重なると、もう、自分の弱さに只ただ辟易するしかない。

.....。

..... まあ、でも、こうやって繰り返していれば、何時かは、成功する時が来るだろう。

今のところ、僕はそう、信じている。

「ハハハ、失敗かア、残念だったナア」

「..... また、お前か」

「おいオイ、または無いだ口？」

「..... お前は、何時も僕が失敗すると、出てくるんだな」

「そうダナ、それが、俺の役目だしナ」

「嫌なヤツだな」

「それもまた、酷い言いぐさだな」

「だって、そうだと、僕が失敗した時ばかり出てくるから」

「まア、そう焦るなヨ。俺としちゃ、お前が何時も失敗してくれた方が、色々と、都合がいいんだからヨ」

「いつも、そう言うな」

「俺の立場からだト、そう言った見解になるんだヨ……まあ、それにしても、お前もなかなか懲りないヤツだな。先週も失敗したシ、先々週も失敗したじゃねエカ。まったく、オレもつくづくお前には手を焼かされるヨ」

「お前が、邪魔したのか？」

「ン、それは、違うナ。俺は何もしていない。大体、俺はよっぽどの事が無いト、何もしなイ」

「それじゃ、僕自身が、自分で？」

「マア、そう言うことなナ」

「……全く、どうしようもない恥さらしだね。これじゃまるで生きながらにして恥を晒している様なものじゃないか」

「まア、お前には恥をさらせる程の人間関係は無いけどナ」

「……ああ、それもそうだな。僕は人間が嫌いだからね」

「才前も一応、人間だけだな」

「ああ、そうだ、僕は人間だ。だから僕は、僕が嫌いだ」

「ハハハ、そう、それでいいんだ。俺もお前も、随分と嫌われてる存在だからナア。それが自然の成り行きってヤツだ。俺たち八孤独に囲まれてるからナア。全く、嬉しいよナ」

「随分と、物寂しい人生だな」

「寂しいねエ、まア、寂しさってもんハ、人間が怖がるもんだよナア。人間かア、人間ネえ、でもナア、俺たちにとってはコレが普通なんだヨなア。常識ってやつだ。俺もお前も、つまり世ノ中の一般から言っテ、あまり普通ってヤツの部類に入らねエんだヨなア。そうだな、つまり俺たちは結構、例外的な存在って訳だなア。どうだア、嬉しい力？」

「……………」

「ハハハ、そんなにヨロこんでもらえると、俺達もうれしいヨナあ」

「……………もういい、もう、消えてくれ」

「マあ、そう固イ事を言うなヨ。言われなクテモ、俺八もうすぐ消えるんだからヨあ……………なア、俺達が必要になつたら、いつでも呼んでクレヨ。俺はお前が得意な事は苦手だけどナア、お前の苦手な事は大体得意だからヨオ」

「……………僕は忙しいんだ。僕は自分のやった事の後片付けをしなくちゃいけないからな。後始末をしないと。だから、お前は、早く消えるべきなんだよ」

「ハハ、後始末力、そうだよナア、後始末は面倒だよナア、何にせヨ、自分のした事の始末つてモンはよオ……………ハハハ。わかったヨ、俺八、もう、消える、けどナ、……………最後に一ツ、イイか？」

「……………」

「ハハハ、お前がさア、こういう事すんのハ、俺にとってあんまりメリットがねエんだけどヨオ。まア、もしもの時ハ、そんな時に考えるとして。こりゃ俺からのアドバイスだがよオ、今度同じ方法でやるときはヨ、もっと、丈夫ナ縄、用意しとくべきだよナア」

溜め息すら出ない。

ただ僕は、暗い天井を見上げるばかりだ。

世の中に生きる事ほど辛い事はあるか？

死ぬのは一瞬で、生きるのは一生の苦しみ。

本当に？

本当にそうか？

案外、死んでしまうより、生き続ける方が楽なのかもしれない。

そうだとしたら、僕は

一般的な高校生の登校風景

ピー、ピー、ピー、ピー、ピー

鼓膜に土足で侵入してくる単調で不快な電子音。

……ああ……いつもコレだ……うるさいな……もう少し寝かせ

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピ

音はいよいよ僕の残りわずかとなってしまった脳みそ（蟹味噌同然）を叩き起こす程にやかましくなってきた。

……分かったよ、今日のところは僕の負けを認めよう。

仕方がないので、気怠く目蓋をオープンして目覚ましのスイッチを握りこぶしで叩き切る。

……また新しいの買わないと。

まったく、どうしてなのだろうか？

どうして、また、朝がくるんだ？

僕はただ、ずっと眠っていただけなのに。

そして、叶うならば、二度と目を覚ましたくないだけなのに、なぜ夜が終わってしまう？

まったく、嫌な朝だ。

否、それはなにも今日に限った事ではない。

一年中年中無休で平均的に僕の迎える朝は嫌な朝だ。

何が嫌か？

朝の日差しが嫌だ澄み切った空気が嫌だ聞きたくもないのに聞こえてくる鳥の呑気な鳴き声が嫌だあの意識がはつきりとしなないぬるま湯に漬かっているような惚けた自分が嫌だあと人間がキラ

イだきりがない無いのでこら辺で止めておく。

詰まるところ嫌なモノは嫌って事。それが言いたかった。

「だったら立ち上がり、洗面所に向かう。」

我が家の洗面所には鏡という恐ろしい物体は、無い。

正確に言つと、前はあつたが今は無い。

高校に入った時、思春期特有の若気の至りで木っ端のミジンコになつてしまった(トンカチで叩き割ってしまった)からだ。

あの時はアニ(仮)と初めて本気で喧嘩したな。

あれ、初めてじゃなかったっけ? いや、でもあれは僕が初めて

何て昔の思いでに浸っている暇は、あまり無い。

顔を洗い、歯を磨き、髪型はセットのしようが無い程の簾仕様なので、適当に分けるしか施しようが無い。

朝ご飯は勿論用意されている訳が無いので、胃の中にひたすら水道水を流し込み満たし、空想でモーニングセットを作り上げ、自らの体を欺き、我慢するしかない。

パジャマ代わりにワイシャツを脱ぎ捨て、パンツ一丁の僕は、ソファに無惨に脱ぎ捨てられていた制服のズボンを履き、クローゼットから新しい長袖のワイシャツを取り出す。

僕はどれだけ暑くても絶対に長袖しか着ないのだ。と、言つのは嘘で単に半袖を所持していないだけ。

散らかり放題のリビングルームにはあまり座れるスペースが無い。というかこちらがどんなに座りたいと切望しても、座れない。

仕方がないのでソファ(普通一般に言うやつではない)に体育座りをして、リモコンという文明の利器を使いテレビジョンのスイッチを入れる。

我が家の時代に取り残されたアナログなテレビの画面が、だんだんと人の形の像を結び始める。

何か面白いニュースはないか、と数分間色々チャンネルを変えてみたが、一昨日に起きたお偉い人の失言を何度も同じ様なフレー

ズを用いて揚げ足を取るのに夢中な報道ばかりで、どれもこれも似たり寄つたりの気の抜けたものばかりだ。つまり、目星しいものは……無い模様。

画面から目を離し、しばしば外の長閑な風景に目を移す。

目の保養を行いつつ、いつも通り頭の中で暗闇に向かつて話しかける。

殺人事件は毎日何処かで起きているし、政治家の失言や汚職だって最近ニュースで取り上げられる様になった訳ではない。なにせ、僕らが生きる素晴らしきこのご時世は子が親を殺すのが珍しい事ではないのだから。僕ら視聴者も他人面で毎日毎日そんな血なまぐさい話を画面越しに見聞きしているし、僕らの感覚が麻痺するのも無理からぬことである、と思いたい。

再び画面に目を向ける。

最近逮捕された殺人犯について、逮捕前はどんな様子だったかを、近所に住んでいる住民にリポーターがインタビューを試みている場面であった。

インタビューされた中年の女性は「まさかあの子があんな事をするなんて、思わなかったわ」とか「私が挨拶したらちゃんと返してくる、いい子だったのよ」なんてお決まりの返答をやや興奮気味に鼻息荒く語っていた。このおばさんは至極まともだ。ビイコーズウ、少なくともこのおばさんはインタビュー中に顔の筋肉をほころばせてないから。たまにいる言葉と表情が一致しない奴。うすら笑いを浮かべながら「かわいそうだ」とか「信じられない」だの「絶対に許せない」とか言ってるヤツらだ。あいつらは一体どんな心境でものを言っているのだろうか。……彼らは目も当てられない様な悲惨な事件を口では残虐だの非道だのと言いつつも、胸の内で実際は心底そんな様な事件を楽しんでいるのだろうか。やはり所詮、他人事でしかないのだろう。結局人間とはそういう生き物だ。どんなに知識を貯えて倫理的に振る舞う真似事をして、結局は自分の身に起こっていないことに対してはいつだって花見でもしている気分で

しかない。人の不幸は蜜の味とは良く言ったものだ。誰だって自分より不幸な人間を見れば表では同情の意思を示しつつも裏では心の底から蔑み自分より下の人間が居る事実に対して安堵している。そのくせ自分は真人間であるだとか悪い事はしてはいけないのだと悪怖れも無く平然と言う、そしてあまつさえ自分の事は棚に上げたまま放置しておいて、他人の悪所をわざわざ手間暇かけてまで見つけ出し、それを相手が再起不能になるまで糾弾する、しかし当事者である本人は当然の事をしたまてと言わんばかりに、正義の味方面である。まったくもってこういうのが人間という生物なのだから、いい加減ぼくは人間という仕事を任意退職したくなる。……まあ、しかし、そういうのは訳知り顔で勝手に不特定多数の人に対しての想像をしている僕が一番当てはまりそうなんだけれど……。いや、しかし、僕には未だ偽善者の皮を被っていられるだけの理性がある、とは、まだ思っている。

なんて事を一人悠長に思いつつ、ふと時計に目をやる。
時計の針は既に八時十分過を指していた。

……うーん、ヤバイ。

なにを隠そうボクの職業は学生だ。

それも、高校生だ。

世間一般かどうかわからないけど長く辛い人生においてなかなか甘酸っぱいであろうと期待される時期、そう、高校生。10年後に思い起こしてみるとあの頃に戻りたいと言う輩の絶えない、あの、高校生。思っていて非常に悲しくなっているこの僕も、一応、高校生。だが決して義務教育ではないのも、それまた、高校生。

だから、僕は焦らない。

ゆっくり余裕を持って無駄にかさばる重たい教科書を学校指定のバックに詰め込んでいく。

大人の男にはゆとりある余裕が大切なのだ。高校生が大人か子供かは各々の主観に任せるとして。

やっとのことで家を出る。

勿論、元気良く「行ってきまーす」なんてアットホームな言葉は一言も発しない。

「……………」
無言の旅立ち、自称現代っ子とはそういうものだ。

強い日差しを全身に受け、億劫ながら、とりあえず自転車を違法駐輪している公園まで歩く。

途中、近所の奥様方が僕の方を指差し、何かヒソヒソと話しているのを偶然、目撃。

間違っても良い意味で噂されているのではないと分かってはいるが、あえて爽やかスマイルを迸らせて会釈でもしてやるうぜ、と悪魔が僕の耳元で囁いてきたので、なんとか自分の手の平としりとりをして堪えてみる。

おっとう、おっかあ、おめえの息子は我慢強い子に育っただよ（日本昔話風）。

世間の風当たりを気にしている様では真の解脱者にはなれないと誰かが言っていた様な気がする。別に僕は別次元に行きたいとは思っていないけど。

自分の手の平にしりとりで三回負けたところで、ようやく公園に到着。

公園の草むらに隠した（？）自転車は、今日も撤去されていなかった。

その代わり、今日はカゴの中に溢れんばかりの空き缶が入っていた。未だ中身が少し入っているのも多数あった。

仕方が無いので、自転車に前蹴りをかまし、カゴの中の空き缶を地面にぶちまける。

昨日は生ゴミで、一昨日はネバネバした成人コミックスだった。それで今日は空き缶か。

……………。

今日はなかなか、運が良い日かもしれない。

そう思った。

外は夏休みが終わったというのに蝉がミンミンミンと小うるさいを通り越して僕的には全滅してほしい位うるさい。み〜んみんみんみ〜んの方がふさわしいか？ 心なしか蝉の鳴き声がミンミンミンからシネシネシネに聞こえてきたのだが、耳の錯覚とは真恐ろしいものである。

まあ、そんな事はどうでもいい。

問題は蝉の鳴き方ではなく、この異常な暑さだ。

まだ自転車で走り始めて十分と経ってないのに汗でワイシャツが背中に張り付いてくる。 はつきり言っただけ気持ち悪い。いや、はつきり言わなくても十分すぎるくらい気持ち悪い。中にタンクトップでも着てくれば良かった、と少し後悔したが、時既に遅しなのでなるべく頭の中をマシユマロにする方針で生きたいと切に思う。

前方の信号がまるで青から赤に進化しようとしている全身タイトのオッさん（中身が）（たぶん）のカラータイマーみたいにせわしなく点滅を繰り返している。

こういう時は、その人の性格が良く現れる場面だと僕は思う。

もう間に合わないと思ふので無駄な体力を使わずにゆっくりと進む奴と、別に急いでないのになぜか分からないけど無性に全力ダッシュしたくなる奴っていると思う。そこに今の僕のように限定された時間という制限が加わると、これまたおつなものだ。

で、僕は勿論前者の方である。

僕の場合は時間が絡んできて大体前者の方を選ぶと思う。体力無いし。

「……………」
それにしても、暑いな。

暑い中、わざわざ狙って照りつけていると錯覚しかねない太陽の光に焦がされている他校の生徒（多分スルメ志願者）を尻目に、僕

は自転車を道の小端に寄せ、木陰に隠れて一休みをする。

木陰に居るのに額に汗かきむさ苦しい醜態を晒しながら休んでいると、僕の目の前を、赤いランドセルを背負った女の子と黒いランドセル（赤だったら怖い）を背負った男の子が仲良く手を繋ぎ、笑顔で駆抜けていった。

このくそ暑いのに「うふふ」「あはは」とか聞こえてきそうで一気に真夏の怪談宜しく背筋がブルブルしかねない。

僕はその様子を気の抜けた炭酸飲料みたいな心持ちで眺める。

今時、珍しい光景。

ボーイとガールがミーツして仲良く登校ですか。

うふふ、と、あはは、な世界。

うーん、青春の味がする。

山椒？

なんか苦いね。

そしてふっと思う……あー死にてーと。

気がつくと、信号の発光ダイオードは既に緑になっていた。

それでも、僕は動かない。

道行く人が僕の事をジロジロと訝しむ目付きで見てきたので、やつのことで僕はペダルを漕ぎ始めた。

全く、人気者はいやおうにも目立ってしまうから困ったものである。

すうんごい美少女

学校に着くと、幸運な事に未だいつもの（事務的）朝のホームルームが始まっていなかった。僕が教室に入ってきても声をかけてくる律儀なクラスメイトは人っこ一人いない。

それどころか「あいつ、学校辞めたんじゃないの？」とか「なんで、あいつ、未だこのクラスにいらんの？」「仕舞には「あいつの席、どつか他のクラスに移動させちゃえば良かったね」と言うもはや空耳という秘技のキャパを軽く超えて尚かつ音量に全く気を使わない誹謗あーんど中傷のヴォイスが聞こえてくる始末。こんな時は自分がラブコメの主人公になったと錯覚しておく、心なしか耳が少し難聴になれる様な気がしないでもない。

夏休み前の平時から「キモイ」「死ぬ」は当たり前なので、いつもの事いつもの事と思ひ、軽くスルーしておきたい。

夏休み前と何ら変わらない日常。

歯車が欠けているから噛み合わないだけだ。

合わせる気も無いけど。

それはあつちも同じか。

まあ、取りあえず、いつも通りだな。

平穩無事な平和ボケゆとりな逆バブル世代の僕ですから、こんな態度は慣れっこ、これ常識。と、いつも通りに下らない事を考え、鼻を否応にもさす安臭い香水の匂いに顔をしかめつつ、なにげなく教室を見渡すと、男も女もやたら茶髪の生徒が多い様な気がした。女子なんか化粧をしている生徒もちらほら。何やら目の周りにマスカラを塗りすぎてパンダみたいになっている女子生徒までいる。うむ、これが夏デビューってやつか。僕も夏デビューすれば良かった。なんて身の毛もよだつ空想を頭の隅へ追いやり、幸運にも未だ定位

置に存在していた『まいちえあー』（三号）に座りながら取りあえずアホみたいに頬杖をついてみる。

と、髪をツンツンにした黒ぶち眼鏡の男子生徒が息つきながら教室に飛び込んできた。

彼の名前は勿論、僕の脳内メモリーには記憶されていない。というか、初めて見たような気がする。

何事か、と女子も男子も彼の方へと視線を投げかける。

僕は、窓の外の青々としすぎて返って気持ち悪い位などこまでも広がる空を見上げながら、耳だけそちらの方に向けた。

「ニユース！ ニユース！ 大ニユース！ 転校生！ 転校生！ すうんごい美少女！」

男子生徒が述語の抜けた主語だけの言葉を発する。

どうやら学年と季節、そして学校の三拍子を外しまくった転校生が隣のクラスに来るらしい。

この時期に転校してくるなんて、まるでどっかの漫画じゃないか。よほど深い事情があったに違いない。例えば前の学校の窓を全部たたき割ってムカつくヤツをバットで片っ端から血まなこにしたとか、愛する許嫁のためにわざわざ海外の学校からはるばる日本のこんなしょばい＆小汚い、ええ小汚いデスともな学校に転校してきたとか……あるわけないか。

男子生徒はなおも興奮した様子で止めどなく何か話し続けていたが、僕にはもうその声は雑音にしか聞こえなかった。

自称窓際図書委員

一時間目の授業は英語一だった。そして、僕のクラスの担任は英語教師である。

よって、ホームルームが終わると誰も願ってもないのにすぐに授業に突入した。

僕の通う学校は少し変わっていて、夏休みが終了して最初の登校日に喚起力ゼロの蒸し風呂の様な体育館に強制的に集められ校長の有り難い訓示を聞く習慣はなく、素晴らしい作詞・作曲の校歌を歌うというインディアンみたいな儀式も強制されない。おまけに堅苦しい頭髪チエックやら持ち物検査もないという比較的自由な校風だった。だったら、茶髪じゃなくて髪の色が金髪や銀髪はてはピンク髪そしてレインボオウな生徒が居てもいいじゃないかと思ったのだが、残念ながらこの学校には僕を含めてそんな大層な度胸を持つ者は居ない。誠に残念遺憾の極みである。いや、ホントに。

「霧埼、次の文を略してみろ」

英語教師兼担任（ ）が妙に高いかなきり声で僕を指名してきた。

「……………」

え、面倒くさい？

いやいや、僕は自称窓際図書委員ですよ。

それはどうでもいいとして。

僕がもし歌舞伎町辺りの売れっ子ホストだったら「御指名ありがとうございます」とうございます、マドモワゼエル。今夜もドンペリピンクうお願いシャツすうー……！！！！」

なんて言った可能性が最少にもあったかもしれない。けど、あいにく僕は善良な高校生なので……。

寝たフリを決め込む。

「なんだ、霧埼はまた居眠りか、誰か起こしてやれ」

「……」

前方後方右斜め両方向の生徒の皆さんは、誰一人として、反応を示さない。

……全く、皆、恥ずかしがり屋さんだなあ。

「……あゝ、じゃあ牛島、お前が訳せ」

「えゝ俺っすか？ えゝと彼女は」

なんか、サラッと僕のドキドキ偽装就寝が流された様な気がする。なんか……得した？ と、あくまで、前向きに物事を捉えてみる。

人生前向きに物事を考えないとやって生けませんな。

特に、僕みたなヤツはそうだと思う。

まあいつも全然前向きじゃないけど、というか地面に恋焦がれて生きているけど。

せっかく嘘寝したのに起きるのも何か勿体ない気がしたので、とりあえず、残りの時間は人間の生活で欠かす事の出来ない貴重な睡眠時間に当てる事にしよう。願わくばレム睡眠位にはもっていきたいものである……。

幸せについて考えてみたら……

一時間目の終了するキーンカーンカーンという間抜けなチャイムとほぼ同時にクラス中の男子が教室から消滅した。あと噂好きの女子もついでに何人か消滅していた。

なんだろう？ 皆で集団連れションかな？ なんて事はないだろう、多分。

おそらく、例の転校してきた美少女を一目拝もうと、さながら伊勢神宮に向かう古の熱心な信者の如く隣りのクラスを覗きに行ったのだろう。勿論、僕は弁慶の立ち往生の如く（座っているけど）席から一步も動く気は無い。うるさい輩が消えて教室の人口密度が丁度良くなって良かったと思う。欲を言えば残った輩にも退出願いたい所だが、それならば僕が出て行った方がよっぽどつとり早いのでそこは自分の胸の内に秘めておくことにした。

二時間目の論理と三時間目の英語Wは堪え難きを耐えほんとに死ぬる位忍び難きを忍びなんとか耐えた。が、しかし、ここまで耐えてきた自分に非常に申し訳ないが、四時間目の数学は果てしなく苦手な科目なので、自分の弱い心に負け、泣く泣く辞退させてもらう事にした。

勿論、教師には心の中で「授業をサボりますよお」と言っておいた。

僕、真面目だから。

本当に死ぬる位の長期の休み後の授業は、死にそうな位、そう、本当にほんんんんんんとおおおおおーに死ぬる位退屈なモノである。あえて言おう。教室で真面目かどうか分からない

けど、一応、授業を受けている生徒達は愚者……じゃなくて勇者の集まりであると。

そんな訳で、僕はあまり利用される事のない日本史やら世界史の資料が無駄に置いてある教室の奥に、なぜか置いてあるベンチ（公園に置いてあるようなブルーのヤツ）の上に寝そべりながら、皆より一足早い昼休みを満喫していた。

ここは、薄暗くて風の通りも悪い僕の数少ないリラックスポイントの一つだ。

室内はホコリっぽく、ほのかにカビ臭い。それ故、生徒も教員も滅多な事がないとここを訪れる者はいない。たまに、授業時間を完全無視した男女（僕に理解できない存在）が突如として訪問してくる事はあるが、大体、黒板前の長机の席に座すので、僕の存在には気づきもしないで自分達の世界へどっぷりと漬かってゆく。まあ、こちらから関わりを持つともしなければ無害の部類に入るだろう。

とにもかくにも、今現在僕の憩いを邪魔する奴は居ない。

僕は静かに目を閉じた。

そうして現代の食料問題について考える。

今日の昼食はどうしようか？

また、水道水で凌ぐかな。いや、それだと5時間目の持久走の時120パーセントの確率で貧血になってぶっ倒れる。当然、誰も救いの手は差し伸べないので、体育教師のむさい肩に担がれて保健室へ……うん、考えただけでも身の毛がよだつ。

仕方ないが、コンビニで固形物でも買って凌ぐか。いや、だがしかし……最近まともな物を食べた記憶が無い……。当たり前の事だが僕に弁当なんて高等なものは作れないし作ってくれる心優しい彼女は、言うまでもない。

そんな事をたわいもなく考え込んでいて、唐突に思った。

幸せってなんですか？ と。

なんか、テレビ番組のタイトルみたいな質問になってしまったが。

……幸せって何だろうか？

毎日三食規則正しくバランス良く食事をとる事だろうか？

そうなる僕が即幸せの対象外になる。

それとも、何不自由なく日々の生活を送る事か？

いや、素晴らしい生涯の伴侶を迎えて仲睦まじく一緒に年老いていく事だろうか？

別に豊かな国に生まれたから幸せってわけでもなさそうだし、貧しい国に生まれたらそれはそれで世間一般的な幸せを掴む可能性は限りなく低いものとなるだろう。

……少なくとも、僕は今まで生きてきて、幸せを実感した事は無い。

断言出来る。

それ位幸せを感じた事が無い事に自信がある。

いや、それはないだろうと思いたい。

でも、僕には幸せが何なのか本当に分からない。

まあ日々の暮らして幸せを実感している人の方がこの世界では圧倒的に少ないだろうけれど。

ほんのささいな事で幸せを感じる事が出来る、と本には嘘か誠かわからないけど書いてあったし、そうなる僕にはほんのささいな幸せも巡って来ないのか、とマイナスイキな方面に僕の思考はバランスを失い沈没寸前の某客船の如く傾いてしまう。

幸せとは何かと考えれば考える程に訳が分からなくなってくる。

あゝ御免なさい……誰に謝ってるんだ僕？とにかく高校生の分際ですいませんすいませんすいませんなんなん僕があやまらなきゃいけないんだどうして僕が？なんでかな？いつもどうして僕が？僕が下らない人間だから？好きで人間やってるわけじゃないんだだけ？もういいんだ疲れたんだもう許してくれ本当にあーもうだめだ死んでしまいたい死にたい死にたい死にたい？っていうか君そんなに死にたい死にたいってホントに死ぬ気あるのかね？ええそうですとも僕は所詮死ぬ気なんてないですよーだって死んだって虚

しいし痛いし怖いしあーでも死にてー嗚呼 青春したいな
ー本気じゃないけどあー僕が分からないあーあああああ
あああああああああああああ死ぬってなだ？なんなん
だあー分らないあああああああああーあ、こちら辺で止
めとじ。

……だめだ。

思考が掻き回されてめちゃくちやになる。

いつもこれだよ。このまま行ったらまた授業中（戻る気はないが）
に発狂しかねない……。

結局、幸せがなんなのかなんて僕には分からない。

そもそも僕には分かる訳の無い事だったんだ。

……止めよう、こんなくだらな事を考えているとろくな事が

自殺頭痛

「……………なんで」

予兆はない。

その数秒前までは、どんなに下らない事だって考えられるし、本当になんの痛みも感じない。

だけど、僕には分かる。

いつもそうだ。

確かな前触れはなくても、僕は本能的に気がついてしまう。

あと数秒で、僕の頭が破裂すると。

「……………ヤバい……………頭が、やばいやばい、くる、くそ、タイミン
グわ」

それは突然やってくる。

タイミングなんて計れない。

そいつは痛みに耐える準備の時間さえくれない。

「があ、ぐ、ああああぐつつつつつつつつあああぐ、ぐつがあ

ああああああああ」

僕は床に崩れ落ちた。

無様に顔面から。

右目の奥に、この世のものとは思えない痛みを感じたから。

立っている事など不可能だったから。

それは痛みなんて生易しいものじゃない。

形容するならそれは『死』そのものだ。

目の奥から生暖かい血液がじわじわと溢れ出してくる。

眼球の奥で、アイツが、僕の神経を、肉を、引き千切って、食い散らかしているからだ。

「うう、つつつつう」

もう、叫ぶ事も出来ない。

生まれてきた事を後悔する暇も無い。

絶望する事も出来ないまま、只、波の様に押し寄せてくる痛みを受け入れるしかない。

僕に出来る事はただ歯を食いしばって頭を抱えて唸る事だけだ。

唯一の救いは痛みで立ち上がる事が出来ない事。

もし立ち上がったら、僕は窓を突き破って校舎から飛び降りてしまっから。

死ぬ時まで誰かに迷惑を掛けるのはご免だ。

僕の願いは、今すぐこの想像を絶するような痛みから逃れる事。

声に出して叫びたい。

殺してくれと。

でも誰も僕を殺してくれない。

僕には死ぬ権利がないらしい。

だから死ねない。

死ぬ価値すらない。

頭の中の血管、神経を全て、根こそぎ引っ張り出してしまいたい。それができないのなら……。

痛みの波は徐々にその度を増していき、僕は自分自身の手で、いつそのこと右目を抉り出してしまいたい衝動に駆られた。

もう耐える事が出来ない。

僕の意に反して、手が右目へと向かった。

震える指先が、生暖かい粘膜を纏った眼球に触れる。抉り出したい。

衝動が抑えきれなくなっていた。

アイツが眼球を突き破って、外に出てくる前に、自分自身で、僕

を終わらせる。

もうそれしか方法が無い。

人差し指と親指で、滑った目玉を掴もうとした、瞬間。

両目から有刺鉄線を突っ込まれ、脳髓を絡めとられ一気に引き抜かれたと錯覚しかねない痛みを感じた。

反射的に指を離す。

痛みに応答して、眼球の奥から流れ出す様に、痛みが全身へと伝染していく。

心臓の鼓動が胸を突き破る程に、僕の体を上下させた。

目の前の世界が、何時にも増して、歪んでいる。

机も、椅子も、黒板も、全てが溶けてしまったかの様に、その形を成していない。

僕の頭の中の内容物が溶けてしまったからだろうか。

まるで薬の中毒者の様だ。

目の前の光景は曲りくねり、机や椅子が、まるで蛞蝓か何かの生き物の様に、床を這いずり回っている。

いつのまにか、痛みは無くなっていたが。

目の前の光景は、常軌を逸していた。

赤や青の光の柱が刺し込む様に乱立して、世界が光り輝いている。そんな光景の中で。

僕は何も感じなかった。

痛みは消えた。

そして音も消えた。

僕の間が無くなくなった。

僕は指先で眼球を掴んだ。

感覚が無い。

ただ目玉を掴んだという不確かな確信が有るだけだ。指先に少しだけ力を入れる。

目の前の世界が圧縮された様に縮小する。

さらに力を込めようとしてみる。

目の前の世界が蝋燭の炎の様に揺らめき反転した。
掴んだものを、思い切り握りつしてみる。

目の前が、真っ暗になった。

パンチラプチキャバ女子（目の周りはパンダ）

「……………」

意識が有る。

少しだけ考えて、目を開ける。

目の前の光景は、いつも道理だった。

覚めてしまった。

もう一生目覚めないと思っていたのに。

何時もこれだ。

物事は思い通りに行かない。

全く嫌になる。

残念だけど。

仕方がないな。

「息は……………してるのか」

……………どうやら、僕は……………まだ、性懲りも無く、小指程の価値の
すら無い、いや、便所の落書き程の価値すらない人生を、生きてい
る様だ。

もう、頭は痛くない。

時計を確認する。

どうやら30分程気絶していたようだ。

……………。

なんかスースーすると思ったら……………なんで、僕は、パンツ一丁な

んだ？

……まあ、いいか。

今回は失禁もしてないし、目立った自虐行為の跡も見当たらない。髪の毛も……いつもよりは、引っこ抜いていない。

最悪な出来事の後にしては、悪くない状態だ。

しかし、まさかあの頭痛が、今日、来るとは。

薬はちゃんと飲んでいたはずなのに……全く、ついてないな。

最近、発症する間隔が短くなってきている様な気がする。

今回はなんとかあったけど、次にきた時にまた耐えられるだろうか……。

一体、僕はあと何回この痛みに耐えればいいのか。

人間の体は痛みに耐えられる様に出来てるなんて適当な事を言っただけで居るとしたら、僕はそいつの顔を原型が無くなるまで殴ってやりたい。

そんな事を言うヤツは本当の痛みを知らないヤツだ。

人間は理解を超えた痛みには耐えられない。

人は痛みで死ぬ。

痛みで、死ぬんだ。

僕も早く楽に……。

「……………」

やめよう。

これ以上考えるとただでさえ低い血圧がもっと低くなってしま

う。

とりあえず……………。

そうだ、保健室へ行こう。

あの絶望的な痛みはもう感じないが、もう授業に戻る気が

1 ミクロンもない。

そうだそれがいい。

そう思い、ベンチから起き上がろうとした時、教室のドアが鈍い音を上げ、真横にスライドした。

…… タイミング、悪いな。

少しは時と場所を考えて行動してほしいものだ。

僕は慌てて、頭蓋を引つ込めた。

机と椅子の僅かな隙間から侵入者の様子を伺う。

青いチエックラインの入ったライトグレーのスカート、そして黒いニーソックスを履いた細い脚…… うむ、太もも白いな、合格だ。

……と、ふざけてる場合じゃなくて。

女子？ しかも一人？ この制服だ？ この学校のパンチラプ
チキヤバ女子の制服じゃないぞ……。

腕時計を確かめる。

まだ、どの学年の生徒もこの蒸し暑い中クーラーも無い教室で忍
者の如く授業を受けているはず、な時間帯だ。

息を殺して女生徒の動向を伺う。

どうやら、女生徒は真つすぐこちらに向かって来る様だ。

なんでこつちに来る？

まさか、僕がここに潜んでいるって事がばれた、とか？

……いや、それは無いはずだ。

僕の擬態は完璧、というほどではないが、あの位置から僕を視認
する事はまず不可能。

そこんところは僕が実証済みだし。

そんな事を考えて、僕があたふたしているのもおかまい無しに、
女生徒はどんどん近づいてくる。

これは、やばあい。

このままじゃ見つかる。

見つかったら後の対処が面倒だ。

なにより、話すのがやだ。ていうか消えてくれ頼むから三秒以内
に消えてお願いします神様仏様大仏様御老公様サマンサタ。

「……………」

全然消えない……。

なんで？

さて……どうしようか？

ここはまた寝たフリでやり過ごすか。

僕は腕で目を隠し、あからさまに寝たフリを実行する。

足音は、もうすぐそこまで近づいてきている。

と、足音は僕の目の前の長机の寸前で、突然、停止した。

なんか、ちょっとドキドキしてきたな。

ホラー映画だところという時、目を開けると目の前にお顔真っ白な化粧の濃い呪霊がいたりするので、腕をどかして目を見開きたいのを歯を食いしばり必死に我慢して寝たフリを続行。

足音はしばらく停止し、数秒後、もと来た道をコツコツというわざとらしい音と共に引き返していった。

そして、教室の扉の閉まる鈍い音が再び僕の耳に届く。

「……………」

どうやら、侵入者は自分の愚かさに気がついて去って行ったようだ。

もしくはボクのむさ苦しい姿（半裸）（パンツは履いてる）（少しはみ出ている）（汗だく）を見て尻尾をまいて逃げ出したか。

いずれにせよ、今回は何とか危機を脱した様だ。

やっとの事で眼前を覆っていた腕を払い、目蓋を開くと、

目の前に、

青白い顔の少女……いや、幼女の顔が、あった。

僕の目の前に居るのは、切れ長の瞳が特徴的な、肌の白い、小柄な、まあ、なんとというか、幼女だ。

「わたしは、柳瀬伊万里。今日この学校に転校してきたんだ。いやー、この学校思ったより広いねー。危うく迷子になりかけたよ。まあ、前の学校の五分の一位だけ。で、君の名前は、なんての？」
森鷗外です。

なんて言ってもいいんだけど、すぐばれそうだから止めておこう。伊万里か、なんか瀬戸物焼みたいな名前だな。さては、両親は瀬戸出身だな。どうでもいいか。そんな事は。

「……………ここつてさ、高校だから、来る学校間違ってるよ。じゃ、さよなら」

まったく付き合ってらんないよこんなサイコ幼女こっちはただでさえ短い人生をさらに短く死そうになっただよまあそれはそれでいいんだけどでももしかしなんで高校に小学生が

「ぐえ」
突然、後ろから何かを首に巻き付けられた。

思わず、ホントに思わず、間抜けな声が口から飛び出る。

「ちょっと待って。君、それがこんな可愛い女の子に対する反応なわけ？ あと、私は歴とした高校生ですから！」

「ちよ、ぐるじい、ぐび、じばってる、っで」

高校生？ こいつが？ 小学生の間違いじゃないのか？

「じゃあ、あなたの名前、教えてくれる？」

「ぐ……………わがつ、だ」

首に巻きついてた何かが解かれる。

やっとの事で、僕は窒息の危機から逃れられた。

「く、お前、それ、僕のワイシャツじゃないか」

僕の首を絞めていた何かとは、僕が脱ぎ捨てていた、ワイシャツであった。

「あのさ、君、上半身裸で廊下に出るつもりだったの？」

「……………そうだけど」捕まるけど。

「……まあ、とりあえず、コレ、着て」
く、こんな幼女、いや少女から施しを受けるなんて……不覚極まりない愚行だ。

……それにしても、コイツが高校生？

見た目から判断したら小学生にしか見えないのに。

ある特定の人種にウケそうだが……。

まあ、どうでもいいか。

「ふう、じゃ、僕、授業があるから」出ないけど。

「ちよ、ちよっとまって、だから君の名前教えてよ！」

「は？ なんて僕が不法侵入の小学生に名前を教えないといけなくえ、ちよ、ぐるじい、わがっだ、おじえるから」

「もう、早く教えてくれればこんな事しないのに」

なんだ、この幼女？ 何でロープなんて持っているんだ？

くそ、なんか面倒な奴に捕まってしまったみたいだ……。

早い所、こんな奴からおさらばしたい。ついでにこの世からも。

「僕の名前は……」

慣れ慣れしいヤツ

「……僕の名前は、霧崎」

当然、少女の方など微塵も向かず、黒板に向かって自己紹介をする。

「霧咲くん……霧が咲くか、なんかカツコイイ名前だね。多分ご両親は秩父出身だね。いやー、私も秩父は6番目位に好きな場所だし、いいところだよな、秩父って。行った事無いけど」

いや霧が咲くって意味が分からないし。そもそも名前じゃないし名字だし。というか漢字間違ってるだろコイツ。そして最後らへん絶対適当に言ってるんだろ。

「下の名前はなんて言うの？」

「……刑」

ここでまた首を絞められたのでは次こそ本当に失神しかねん。

「けい、ケイか……いい名前だね」

なにを根拠に言っているのか……。

「けい」って響きの名前の奴は五万といえると思うけど、刑って書く奴はあまりいないと思う。

なんとたつて、死刑の刑だ。全くナンセンスじゃないか。心底親の顔が見てみたいよ。本当はこれっぽっちも見たく無いけど。ていうか、馴れ馴れしいやつだな……。

「今、授業中だよな……なんで、あんた、ここに居んの？」

転校初日から授業をバツクレル奴なんて聞いたが事ない。言語道断だ。僕が言うのもなんですけど。

「だって、なんだか退屈なんだもん。大体さ、教科書に書いてある事をいちいち黒板に複写して、それを私達がまた書き写して、ってなんか意味あんのかな？ ただの二度手間だと思うけど。先生の細

かい説明なんかも大切だと思うけど、そんなのより参考書とかネットとか使って自分なりのペースで勉強した方が効率的だと思わない？」
「だったら学校くん塾にでも籠ってる、と言いたい気持ちはそつと筆筒に閉まって。」

出ました。出ちゃったよ。なんで出て来る？

これができる君タイプと言うやつか。

漫画の住人だと思っていただけ、実在したんだ。

少し感動した。もう満足だ。

こういうタイプは大体、口だけで全然勉強できない奴と学校の授業なんて簡単すぎて受ける気しないよってタイプの二種類に分かれそうだな。少女は……勉強はできそうだけど……かけ算とか、割り算が……。

「……僕は、君程頭が良く無いし、今だって授業サボってるわけで」
一応、後者と仮定して話そう。

「別に、私が頭が良いって言いたい訳じゃないんだけど、………まあ、いいや。ところでさ、ケイはなんで授業サボってるの？ しかもこんな小汚い部屋で？」

いきなり下の名前で呼ばれたのはボクの数少ない交流関係の中でも初めての経験であります。

なんなんだこいつは？ 馴れ馴れしいんだよ。ていうか小汚いって言うな。

「……僕は……ただ、あの教室に、居たくないから」
嘘は言っていない。

あの教室に居ると山岳ゲリラみたい息を殺して、淡々と授業を受けてないといけないから。

休憩時間に僕が取る行動パターンなんて数種類しかない。

教科書と睨めっこをして遊ぶか、ひたすら真っ白なノートを黒鉛に染めていく作業に従事するか、窓の外を見てバードウォッチングに徹するか、もしくはトイレに行くか、それくらいしか、僕にはや

る事がない。

たまに聞こえる僕の悪口には、聞こえているのに、無理矢理聞こえていないフリをして、対処する。

仕方が無いにも程がある。

教室内で僕は忌み嫌われた存在なのだから。

笑いたい。

……笑おうか。

はっはっは……。

詰まる所、僕は、教室に居てはいけない存在。だから、仕方がない。

それに、僕は始めから、諦めている。

よし、今度から売店の自動販売機にでも交代してもらおう。あばちゃんの方でもいいや。

「なぐんか、暗い顔してるよ、ケイ？ よーし、こうなったら、恒例のアドレス交換しようか！ うん、それがいいよ。ていうか、親睦深めるためにさ、大学1回生時は誰でもいいから知り合った人とメアド交換しとけば十回に一回はコンパに呼ばれるっていう理屈でさ、ね？」

なんの恒例だよ。

そして、その理屈は僕には当てはまらないぞ、とはいちいち言わない。

ていうか、ほんとーーーーに慣れ慣れしいヤツだな、こいつ。

イケメンに感情移入が出来ない……

携帯か……存在自体忘れていた。

たしか入学時に無理矢理持たされた奴が腐ってなければポケットの中にあるはずだけど。

ズボンのポケットの中を弄ってみると、何やらひんやりとしたものが指先に触れた。

掴み、ポケットから物体を引き抜こうとして、しばし、思考にふける。

当時最新機種だった薄型軽量の携帯も今となっては店で売られているか売られていないのか分からない値段で売られている。つまり値下げ。いわば旧世代の産物と言った所か、ちよつと違うか？ いや、そんな事はどうでもいい。

それよりも、なんで、僕は、こんな慣れ慣れしいやつとアドレスを交換しようとしているのだ？

そもそも、僕は人間が嫌いなのにどうしてこんなにも人間と会話をしているのだろうか？

というか、僕も一応は人間なんですけれども。

いや、この際そんな事はどうでもいい。いや良くないかいやしかし

そんな事で僕が思考を掻き乱している間に、少女が、勝手に僕のポケットに手を突っ込んできた。

ああ、なんてことだ！ 女の子がはしたない！ マアイガ！ と一応、思ってみるか。

「おーケイの携帯薄いね。それに新品みたいに傷一つ無いし。ケイって物を大切にする人なんだね。偉い偉い。やっぱりケイはそうで

なくちゃ。それじゃ、はい」

少女がボクに携帯を返してきた？

なんか、いい感じに勘違いされて偉い人にされた。僕にしては大出世だ、で？

「なんで、携帯突き出してんの？」

「え？ だってメールアドレスって赤外線通信で交換するもんでしょ、普通？」

「……………何それ？」

「またまた、しらばっくれちゃって。女の子とメアド交換するのが恥ずかしい気持ちは分かるけど、誰も見てないからイイじゃん、ね？」

少女はすり師の様に見事な手際で僕の手から携帯をさらりと抜き取り、何やらボタンをピポパと押し、ほどなくして返却された。

返却された携帯の液晶画面には『送信しますか？』という表示が

「ほれ、早く送信しなされ」

少女の携帯と僕の携帯は無理矢理お見合いをさせられ、勝手にボタンを押される。

「じゃあ、今度はわたしのメアドをと、ほい、送ったよ」

数秒後、僕の携帯が家の物置に放置されているこのままでは永遠に眠り続けるであろう古いマッサージ機のようにブルブルと震えだした。

「画面を開くと『メールを受信しました』の表示が。

受信ボックスを開くと、そこには一通の空メールが届いていた。

件名には『ヨロシク！』と。

ちなみに、僕の携帯のアドレス帳には今の時点では少女を合わせて二人しか登録されていない。今後、増える予定は、今のところ…
…というか今後も、多分一生、皆無だ。

それにしても、携帯って赤外線メールアドレスを交換できるのか。

へー、今の今までメール交換なんてしたこと無かったから全然シ

ラナカツタヨ。

テクノロジーの進化、恐るべしですな。

え、ただだけ脳みそ沈殿してんだって？ さあ、あんまり使っていないから。

「なんか楽しい事あったらメールしてね。それと、こつちからもばんばんメールするから。この複雑にデジタル化された社会で、情報交換は重要だからさ。勉強の事とか遊びの事、なんでもいいからさ、ケイはね、私に、気楽にメールしてくれていいんだよ？」

何だその理屈？

……気楽にメール、か。

冗談だとしても、その言葉は僕には似合わなすぎる。

幼女、もとい少女よ、あなたは僕が女の子に気楽にメールを打てる、そんな現代の光源氏のような無責任な男に見えるんですか？ だとしたらすぐさま病院に直行する事をお勧めしますあしからず。

「……………」
何て言えば良いのか分からず口を開けたまま、またもや惚けていると。

「それじゃあ、お腹も空いてきたし、なんか食べるにでも行きますかー」
と、少女が暢気にのたまった。

まだ、他の生徒は授業中ですが。

そんなのあたしや関係ないわーってことですか。そうですか。ま、それもいいか。ってちよつと待ていッツ！ 落ち着くんだボク！

なんだこの展開、なんでボクこんな流されているんだ？ クールになれ！ そうビズになれ！ こんな展開深夜アニメでも早々ないぞ！ これは罠だ！ そうに違いないボクを陥れる罠に違いない奴の罠だ！ 騙されるなボク！ ていうか奴って誰だ？ あーもう誰でもいいやそれより疲れたわ眠いわイケメンに感情移入なんて出来ないわもうどうでもいいやつてどうでもよくないッツ！

「……………なんで僕が……………あんたが、一人で……………行けばいい」

それはもはや全国の学生の伝統と言っても過言ではないくらい常識的な事だろ。

それをどうでもいいって、まあどうでもいいと言えはどつでもいい事だけどさ。僕には関係ないし。

「じゃ、行こつか」

「なんで、僕が」

「えー？ 行こつよー」

「……1人で行けばいい」

「こんなか弱で可愛いキュートでセクシーな女の子に夜道を一人で歩かせる気ですか？ それは正気の沙汰で言ってるの？」

「しつこいな、今昼だし、あんた絶対高校生に見えないし。ていうか、あんたさ、さつきから慣れなれしいんだよ」

「人とのふれあいって結構大切だと思うよ？」

「もういい……もういいから……もう、僕に、干渉しないでくれ」

「だが、そこがいい！」

「おまえ、頭湧いてるのか？」

「ちょ、失礼だよ！ 謝って！ 私に土下座して！」

「は？ なにを、って、おい、やめろ、なんで縄、って、それはホントにヤバいから」

この後、僕と少女の行く行かない論争はおよそ五分間続いた。

そして、果てにこのシーソーゲームは不毛と、やっと気がついた僕の手によって終止符が打たれた。

サンマ定食（585円税込）

あの後、半ば強制的に外出させられた僕は「美味しいものが食べたいなー」という高校生の昼休みに摂る食事には到底似つかわないうりクエストを聞き入れ血まなこになり「おいしい」食事所を探した結果、時間も時間になってきたので少女を行列の出来るファミリレストランに案内した。

僕的には、無人で美味しい食事を出してくれる店を探したのだが、残念な事にそのような店は学校の近辺には存在すらしなかったみたいである。

少女がなにやら文句を言っていた様な気がしなくてもないが、とりあえず聞こえないフリをしといた。

僕らが来店したファミレスは（ファミリーなレストランと謳っているもののファミリーよりはチンピラかぶれの高校生の方が多い）店の事などおかまい無しの我が校の在校生に人気のたまり場であった。

が、しかし、この時間帯には当然この場所にそのような学生は存在しない。

つまり何が言いたいのかというと。

我が校のチンピラかぶれはしっかりと授業には出るらしい、という事を言いたかった。

僕らは、店の一番奥の窓際席と正反対の環境の座席に隣り合って着席した。

この隣り合う、という行為は別にバカッフルに着想を得たというわけでは毛頭無く、僕の強い要望故の行為であった。

当然の如く少女からの猛抗議が寄せられたが、我らの脳内議会はイエスカノーか半分かの三択を少女に提示し、無理矢理承認させた

次第である。

入店後、2分程で僕の注文は決まった。

どうやら少女の方も既に決まったようだ。

「ご注文はお決まりでしょうか？」という明るめ鬱な声（僕の偏見）が聞こえてくる。

おそらく若い女性の店員だろう。

僕はメニューを指差し自分の注文を言い、自分の注文が終るとすぐに席を立ちトイレに直行した。

どうも、こういった場所はあまり好かない……。

人が沢山いるし、聞いたくもないのに笑い声が聞こえるし、人の臭いがするし、明るいし、アーシニティーという気分にもなってしまうのだ。くわばらくわばら。

注文した料理が運ばれてくるまで、僕は少女の休む事の無いトークに適当に相づちを打ったり、5回に一回くらいのペースで自分の意見を述べたり述べなかつたりして、なんとかやり過ごした。

人と話すのは僕の苦手科目（数多くある）だ。

正直面倒くさい。人として駄目である。ていうなんで生きてんの？ とかそういう話は無しの方向で。

ほどなくして、注文した料理が運ばれてきた。

僕は自分の目を疑った。

まず、僕の目の前に置かれたモノは良しとしよう。普通の和風定食だ。ここは洋風のファミレスだけど。

問題は少女の目の前に置かれたもの、だ。

チヨコレートパフェ、イチゴパフェ、ふむ、ここまでは未だ良いであろう。

さすがにお昼ご飯がダブルパフェはないだろう、とは思ったものの、女性は甘いもの好きっていうのは前に本で読んだ事がある。別段、お昼ご飯を菓子パンやスナック菓子などで済ませるOLや女子

高生が存在する現代の世の中ではなんら不思議な光景では無かるう。しかし、しかしだ。

この後に、フルーツパフェ、カスタードプリン、チーズケーキ、チョコレートケーキ、ラストにかき氷が僕らのテーブルに舞い降りた時には、さすがの僕も店員に「この席であつてますか？」なんて聞こうと思つてしまった。いや、聞かなかつただけだ。

店員もまさにお顔真っ青であつた。

「さーて、食べますかー」

なんて、人の気も知らないで、呑気に言う少女。

「……………」

僕はあまりの衝撃で、呆然としてテーブルに鎮座するスイーツ……いや、発音が違うな……正しくはスイーツの大群を直視するよりほかなかつた。

そんな僕を尻目に、少女の食べるペースは意外や意外、早かつた。某黄色い口だけお化けがドットを食べるスピードと同等、と言っても過言ではない早さでスイーツを平らげていく。

聞きたくは無かつたが、周囲の客が陰険な笑いを堪える声が勝手に僕の耳に進入してくる。

仕舞には通り過ぎる店員までもが口元を抑える始末。

僕が高校生（自称）で隣りの少女は明らかに小学生にしか見えなからつて、少しは遠慮というものをするべきだ。ていうか死んでください全滅してくださいお願いします。

しかも、である。

僕はおそらく少女の隣りで箸を持ったまま授業中毎日の様に窓から外を見ている時に見かける校舎の一点（女子更衣室）を凝視しているよぼよぼのおじいさん（不法侵入）みたいな表情をしていたに違いない。

笑われても仕方なし、と割り切るしか他ないのだろう。

やっとの事で僕が自分の食事に手をつけようと我に返った時には、既に少女はかき氷に手を差し伸ばしていた。

サンマ定食（585円税込）のワカメ万歳な味噌汁の生ぬるい温もりに奇妙な親近感が自然と湧いてくる今日この頃である。

非常に悔しいが、隣りに座る少女はさぞかし満足そうな表情である。

ふと窓の外に目を向ける。

相変わらず太陽の光がちりちりとアスファルトを焦がしている。

日傘持ってくれば良かったな、あと、日焼けクリームとビーチボールも、ついでにスルメ焼きてー、なんか無性に。

……………あ。

そういえば僕、誰かとまともに会話したの久しぶりだな。

まあ、でも、全然嬉しくないな……………。

につき

初めて見たときから僕は彼女に惹かれていた

どの様に表現すればいいのだろうか

彼女はどん底にいた僕に手を差し伸べてくれた

彼女は僕を見てくれた

彼女だけは僕を見てくれる

彼女は他の誰とも違う

彼女は特別なんだ

彼女を一目見るだけで

僕は生を実感できる

彼女はとても美しい

穢れのない

純真な瞳

触れたい

彼女に触れてみたい

彼女の吐息を感じたい

彼女を僕だけのものにした

彼女は僕にふさわしい

彼女の名前を知りたい

彼女は明日もあの場所に来るのだろうか

大丈夫

大丈夫だ

僕らはまた会う

絶対に

絶対に

僕らは

また出会う

月曜日の三つ編み

月曜日は億劫だ。

何が悲しくて約八時間も人間版蟻の巣みたいな学校に監禁されなければならぬんだ。

僕たちは、いや少なくとも僕は昆虫でもないし爬虫類でもない。

いや、ホントに……。

そもそも、なんで僕は学校に通っているんだ？

僕にとって学校とは丑三つ時に呪われた家で一人で見る呪われたビデオみたいな存在なのに……砕いて言うと死ぬほど嫌いって事だけだ。

そんな背筋も凍る様な学び舎に、なぜ？

なぜ、僕はしげしげと惜しげも無く（全然真面目ではないけれど）通っているんだ？

親の様なそうでないような存在（一人）に「行け」（命令）と言われているからか？

それはなくもない。

でも、それはまだ半分。

それとも、勉強をしないと将来が不安で夜も眠れないからか？

それは僕じゃない。

大体、今更、自分にそんなまともな将来が待っているとは到底思えない。

ただ単に学校に行っていれば将来適当な職にありつける、などと思っっているからか？

それも僕には当てはまらないと思うけど、大半がそうかもしれない。

それに、僕は再三言う様だけれど、自分にまともな将来があるな

どと言ふ戯れ言は微塵も消しカスほどもミジンコの触覚ほども思っていない。

それでは、身震いするほどの素敵な出会いを望んでいるのだろうか？

人とろくに関わろうともしない奴がそんな事を思い浮かべるだけでも論外。

完全にリングアウト。帰ってください。そしてもう二度と我が家の門をくぐらないください。

さて、では、どうしてだろうか？

なんで僕は好きでもない学校に通っているんだ？

学校に行っても嫌な事ばかりじゃないか。

友達もいない。勉強も出来ない。クラスは勿論のこと教師からも嫌われている。もはや存在自体が不明。居ない方が良い奴というかもつむしろ生きていない方が良い奴。

……やっぱり、わからない。

幾ら考えても、残り半分の理由が見つからない。

自分の事なのに自分では分からない。

なんでだろう？

なんでだ？　なんでだ？　なんでだ？　なんでだ？

誰か教えてくれないかな？

誰も教えちゃくれない。

僕は今までそんな優良な人間関係を誰とも築こうとしてこなかったから、いや、例え築こうとしても相手から願ひ下げされるのが関の山だろうけど……

考える。いや、考えるな。いやいや考える。無いもの総動員で真剣に考えれば何かしらの答えがぼつりと浮かび上がって来るかもしれない。考える考える考える考える考える考える

あーあーあー頭痛い……ワレル……

だめだ、分からない、ギブアップ、ダウン。

ワン、ツー、スリー、カンカンカン、挑戦者1ラウンド開始10

秒でスリップ。

そのまま意識不明でチャンピオン初防衛に成功。

「……………霧崎君」

挑戦者、そのまま起き上がれない！

「…………霧崎君」

チャンピオン、不適な笑みを浮かべています。

「霧崎君！」

「？」

目蓋を開けると、前の席の女の子（三つ編み&眼鏡）が物凄く迷惑そうにプリントを押し付けてきた。

「……………」

半口開けてかどろかには分からないけど、一応言い訳程度に寝ぼけ眼の惚けた表情をしてみようと努力。

三つ編み眼鏡は依然として眉間にしわを寄せつつ、あからさまに嫌な顔をしている。

仕方が無いのでプリントを受け取ろうと手をのばしたら、三つ編み眼鏡は勢い良くプリントを僕の机の上に叩き付けた。

……………これは、そう、彼女なりの照れ隠しに違いない。

何に照れたのかは知らないが、きつと髪型、おそらく三つ編みの玉の数でも変えたのを僕に気がついてもらえなくてご立腹なだけだろう。

……………相変わらず、自分の考える事は際限なく気持ちが悪いな、そう思った。

一人の心

気を取り直して、黒板に目を向ける。

教卓の上では担任ではなく生徒が何事か黒板に書き出していた。担任は教卓の横に置いてあるパイプ椅子に座って、生徒に向かって何か指示を出している。

ああ、そうだった。

今は終学活中だったんだ。

そう言えば昨日、明日の終学活を利用して文化祭関連の事を色々取り決めるとか言ってた様な気が。

あまりにも退屈だったから意識がどっか他の世界にぶっ飛んでいた。

黒板の上方には『文化祭の出し物について』と書いてあり、その下には『お化け屋敷：5人』、『喫茶店：6人』、『縁日：3人』、『展示：26人』という箇条書きが。

どうやら、今は文化祭の出し物を決めているらしい。

このクラスは『文化祭で張り切ってメイド喫茶をやっちゃおうぜ！』という現実面を全く考えない非現実的な空想少年、又は妄想少女達の集まりではどうやら無いらしい。残念だ。

僕は別にメイド喫茶の危険性とか安全性なんて議論するつもりは禿げかかった教頭の頭部に僅かに残っている毛髪くらいないけど。校長は既にダチヨウの域なので教頭とデットヒートウを繰り広げた末に惜しくもコースアウト。まあ、今のところ、僕には関係ない事だけど。そこまで年を取る予定もないし。

とにかく、このクラスの大半は運動部だから（多分）。仕方ないな、うん、人生そんなもんだ。

討論になつてない討論の末、我がクラスは修学旅行先の沖縄について、新聞の様なそうでないような、いや、でもどちらかという新聞の部類に入るかもなモノを展示することに決定した。

僕は修学旅行にもこの文化祭の真似事にも当然参加する気はさらさら無いが、というか僕が参加しても場の空気がうなぎ上りに下落するので、距離を取って陰から生温かく見守っておく次第である。

この学校の文化祭では『休憩所』みたいな手ではなく腕が二の腕ごとズポッとすっぽ抜けるぐらい手抜き工事な出し物は禁止されている。

なんでも、我が校のスローガン『努力を惜しまない若人を育てる(仮)』に乗っ取った方針らしく、毎年やる気のない生徒のかつたるような非難の眼差しを喧嘩上等な精神でデパートの安売りバーゲンに群がるおばちゃんの如くかっている、が、そこは意地でも変える気は無いらしい。どうやら頭の中にお地藏さんが入っている様だ。既に教室内では必要な道具は誰が揃えるか、誰が何処に買い出しに行くか等の相談が始まっている。

あらかじめ言っておくと、事實は小説やアニメの類いとは違う、という事。

つまり何が言いたいのかというと、現実って夢がなくてつまらないよね、という事。

つまりつまりなにが言いたいかというと、やりたくもない事を無理矢理やる必要は無いんじゃないか、という事。

大体、こういう時に空回り気味なやる気を出すのは至極少数である。

他の大半の生徒は全くといって良い程やる気が無い(断言)。

大方の女生徒はやる気のない奴でも一応、何か適当に手を動かしていれば頭数に数えられる、という『私やる気は無いけど皆から仲間はずれにされたくないからがんばってるフリするかー、はあ……メンド』なタイプとあからさまにやる気のない『私やる気ないし口の開閉に忙しいからほとんど手伝わないけど、一応放課後は残るか

ら』なタイプに種類が分類される。両者の数はクラスによってバラツキがあるみたいだが、このクラスは丁度半々くらいに別れている気がする。大抵の女子はランク分けされたカースト制の様なグループの何処かしらに所属しているので、お友達付き合いを重視してグループの一人が残れば金魚の糞の様につられて数人が残留する傾向がある。彼女達が自分の意思で残っているのかそうでないのかは置いておいて、一応残って手もしくは口を動かすから、役には立っているのだろう多分。稀に見かけるグループから漏れた女子は、誰もやりたがらない雑用を押し付けられてもクラスの一員という奇妙な連帯感からそれを断る事が出来ず、かといって堂々と帰宅することも厭わず、仕方なく押し付けられた仕事をこなすしかないという状態に、大体、陥る。断れば良いのに、とは言えないし言わないしあちらも僕なんか言われたくないだろう。とにかく、いやー、女の子ってホント仲がイインダーナーと思う、心の底から。

で、男子の分類はもつと簡単だ。

ほとんど全員が『やる気は毛頭無い』という奴だ。

「俺、部活の大会近いんだよね」という生徒（よくもまあ、大会が重なるもんだね）が続出し、皆、早々に帰ってしまう。

残った暇人達は、自分から女子に話かけて仕事をもらうのも何だし、という不屈の精神で小学生がやりそうな馬鹿げた行為に興じるか、運良く仕事を貰い単純作業に勤しむかのどちらかをいままで自分がクラス内で作り上げてきた己のキャラクターを良く吟味して選ばなければならぬ。一見してたわいもなさそうな事であるが、ここで下手をするとどちらからも漏れて、教室内を浮き世雲の様に浮浪するハメになる。

文化祭という毎年恒例の何気なさそうな平凡イベント一つ取って試してみても、そこには生徒各々の色々な思惑が渦巻いているというのは、やはり青春というものは一筋縄には行かないという事なのだろう。青春と言う単語からもつとも縁が無い僕がしたり顔で言うのもかなり場違い甚だしい所だけれども、思っているだけの事だから、

問題は無いだろう。

ここまでいろいろと考察してきたが、ふむ、なにやら偉そうな事を頭の中で一人物寂しく語っているこの自分自身の今後の文化祭準備に対する行動方針は、というところ……去年の反省を生かし、何一つ干渉せずにひっそりとクラスから消滅すると言っモノだった。

僕にはクラスに残って不労者になるつもりも無ければ浮浪者になるつもりも、毛頭に無い。

皆と協力して作業に勤しむなんて、考えただけで背筋が凍って凍傷になって足の指先から頭の頂辺に至まで壊死して絶命しそうだ。

僕は死ぬならヒマラヤ&フジャーマ&テンプーラと決めているのだよ。

大体、僕が参加したらクラスの雰囲気はうなぎ上り（×2）に悪くなってしまおう事である事は、容易に想像が出来る。

それに基より僕なんか誰も必要としない。

手を出そうものなら、絶対零度の冷たい視線がもれなくプレゼントされるだけ。

他人からの冷たい視線はずっと前から慣れている。

だから、今はもうあまり気にならない。

他人に自分の事を分かって貰おうなんて烏滸がましい気持ちは、無い。

いくら自分が相手の事を親友だとか恋人だとか思っても、相手が自分と同じ気持ちとは限らない。

反対に勘違いしてるだけの場合が多いと思う。

自分の主観は、あくまで自分の主観。

自分は自分、他人は他人、どこまで行っても平行線だ。

それが近づく事はあっても、交わる事は絶対に無い。

他人のそれと交われるなんて思えない。

もし、交わったと思っても、それは感情が拮抗しているだけだと思っ。

人はどこまで行っても一人だ。

他人と分かり合えると思わないほうがいい。

そんなモノは偽りにすぎないから。

だから、他人と分かり合えるなんて、最初から思わない方がいいんだ。

僕は、静かに席を立ち、誰にも咎められる事なく、教室から出て行った。

階段を降りている時、ポケットの中の携帯が震えていた様な気がしたけど、とりあえず無視しといた。

妖怪子泣き幼女

外の空気は湿った熱気に包まれていた。

この季節独特のなんだか汗臭い空気を電子レンジに入れて煮詰めた様な臭いが鼻腔を直撃し、僕は少し咽た。

校庭では授業が終ったばかりだというのに、野球部の連中が純白のユニフォームを身に纏い、ランニングに勤しんでいた。誰も彼も、皆一様に涼しそうな髪型だ。部室棟の前ではサッカー部とバトミントン部が業者や教員用の駐車スペースの近くでドッチボールに興じていた。相も変わらず、仲のよろしい事で。どうやら両者共また顧問のハゲ親父とデブ親父のコンビに叱られたらしい。何と言う顧問愛だろうか。彼らの特徴はどう考えても教員に見つかったら怒られそうな事を毎度毎度、懲りずに行う事だ。不屈の精神ってヤツかそれとも折れない心ってヤツか、はたまた、ただ単に流されやすい人間の集まりなのかは、到底、僕の乏しい知識や経験からでは推測する事が出来ない。

校舎裏の、二年生用の自転車置き場に行くと、やたらふくれっ面の小学生が居た。

……まったく、ダメじゃないか、ここは自称大人の溜まり場。つまり、かつこう良く言つと、高等学校だ。

小学生が居ていい場所じゃないんだよ。

ん、迷子？

しょうがないな……

それじゃあ、お兄さんと一緒に職員室に行こうか？

とか言ったら冗談抜きで多分僕はこの学校を退学になり兼ねない。それはまずい。

ん？　さてよ、それはそれで、口実が出来て

「あがが、じよ、ぐ、やめ、で、ぐび、ば、やばび、あが」

すると、まるでお気に入り入りのスカーフを巻く様な手際で僕の首にロープが巻かれ、加減なく締め上げられていく。

「ねえ、なんで無視するの？」

「ぐげえ、ご、ごべんな、ざい」

やばい。

この子ホントに、加減を知らないらしい。

あ、目の前が、真っ白。

「もう、さつきも携帯出なかつたし……」

「がはっ、ハあ、ハあ、し、死ぬかと思った」

頭の中の僕の呻き声が「あばばばばばばばばばばば」となる寸前で、締める力が弱められた。

かなり危なかった。

一瞬、売店のおばちゃんの顔が見えた。

え、走馬灯が売店のおばちゃん？

「ねえ、今度からは私の電話は絶対出てよね！」

拗ねるような、小さい子供が駄々をこねる様な口調で、やけに「絶対」という言葉を強調して、言い放つ少女。

そう、今まさに僕が誰に屠殺されかけたのか。

犯人はこの幼女である。

……それにしても、コイツ、手加減という言葉を知らない地域出身の様だ。

「おい、だからって、行き成り首を絞める必要は」

「あるもん」

「ないだろ」

どこの映画に出てくるサイコ幼女だこの幼女。

あれ、なんか新しいジャンルじゃない？

「それよりも、今度からはちゃんと電話出てよね！」

「……いや、さつきは、クラスで文化際の話をしていて電話に出れ

な

「嘘つき！ だって私が電話した時、君が階段下りてるの見てたもん」

「……じゃあ、いちいち電話しなくて」

「だめなの！ だって君、私が直接話しかけたら、どうせ逃げるでしょ？」

「おー、なんだこの幼女良く分かってるじゃないか。」

「……ニゲナイヨ」

「ほら、やっぱり逃げるつもりだったんだ」

「だからって、首絞めることは無いだろ」

「ある」

「いやない」

「なんで僕の首を絞める事に対して一々固執するんだよ。」

「……まあいいや。僕もう帰るから」

「全く付き合ってもらえんよ。」

「首が何本あってもこんなサイコ幼女に付き合ってもらえないな。」

「僕はバツクを籠に投げ入れ、自分の自転車を車列から引き出し、」

「跨った。」

「……」

「なんか、重いな。」

「太ったかな？」

「……どんな魔法だよ。」

「……降りろ」

「あ、私、駅まででいいから」

「いや、だからさ、そうじゃなくてお、ぐ、がががが、じよ、ね、なん、で」

「く、苦しい。」

「こ、これは、妖怪子泣き幼女の仕業か！」

「いや、あのさ、ロープは反則だからっていつかなにその手際の良さ、首に巻きつくのがわかんないくらい手際いいってどこの殺し屋だよ、」

あ、でもさつきより加減してくれたみたい何この不思議な感動ねえ
これでいいのか僕？

「ねえ、駅まででいいんだからさ。いいでしょ？」

「ぐ、わ、わかった」

ここは黙ってこの少女の言う事を聞くのが得策か。

はっ、警察に……確実に変な誤解されて僕が豚箱行だな……

仕方無しか……

だが、しかし、問題が結構山盛りにあるのだが……

僕のお義父さん

元気よく「ただいまー！」と心の中で言っただけはみたものの、実際、声に出すのはセーラー服を着用し学校に行きわざと際どいパンチラした挙げていちゃもん付けるくらい気が引けたのでやはり止めておく。非常に恐ろしい妄想である。

僕はなるべく音を立てない様にドアを開閉し、無言の帰宅を果たした。

くそ、少女を駅まで輸送するのは思いのほか……いや、予想は出来たけど……大変だったな。

……仕方ないじゃないか。

この僕の100メートル走で貧血になるような基礎体力で二人乗りなんて高度な技走は始めから出来っこなかったんだ。一体何度車に轢かれかけたか……少女は僕らの寸前の所を車がすれ違っていくのを面白がっていたけど、多分車を運転していた人にとっては迷惑極まりない行為だったろう。

他人に迷惑をかけて死ぬなんて僕のポリシーに反している。

僕は死ぬ時くらい誰にも迷惑を掛けずに一人ひっそりと孤独に奇まれながら山奥かどこかで果てていく、と心に決めているのだ。まったく、危うく僕の計画が破綻する所だった。

……はあ、でも、今日はホントに色々と疲れたな。

僕は今日一日でこんなに神経すり減らして疲れ果ててしまっているというのに、リビングルームは相変わらず、足の置き場の無いくらい……はあ、な有様か。

まあ、でも、結局僕はどれだけこのリビングルームの惨状に文句を垂れても、この状況を改善しようとする善処をまったくしようと

する気がないのだけれど。

そんな事を考えながら、頭を垂れ、床に向かってため息を一つ吐き、雑音を甚だしく僕の耳に届けている今時珍しい我が家のアナログなテレビに目を向ける。

僕が学校へ行く時、テレビを消すのを忘れてらしい。

テレビ画面は今朝僕が見ていたチャンネルに固定されたまま、淡々と目に優しくない青白い光を発し続けていた。

蜜柑色の西日が差し込む、涼しさの欠片も無いこもりにこもった室内で、僕はまた、深いため息をついた。

帰ってきたら帰ってきたで、今日という日は果てしなく僕を憂鬱な気分にしたらしい。

まったく、こんなんで良くエコエコ言えるもんだな、とかお門違いな文句を脳内で垂れ流しながら鬱屈した気分でテレビを消し、もういつその事今日は早々に寝てしまおうかな、などと考えつつ、リビングルームを出ると、

ばったり、本当にばったりという表現にふさわしく、アイツに遭遇してしまった。

気配は全く感じなかった。

扉の開く音も聞こえなかった。

でも、アイツが目の前に、居る。

茹だるような熱気の中、額から、嫌な汗が、一気に吹き出してくる。

だけど、僕の心臓は、冷水風呂に浸かった時のように、何かに締め付けられているような圧迫感に襲われていた。

どうやら、今日は、本当に、運のない日の様だ。

これで、確定だ。

アイツの顔が視界に入る。

一瞬、こみ上げてくる吐き気に目が眩む。

が、日頃の習慣というやつであろうか、体中の筋肉（無いよりマシ）が自然と来るべき衝撃に耐えるべく、臨戦態勢に入る。

保健室の人体模型と張り合えるくらい、無表情な顔。

まるで人間味を感じさせない、濁りきった二つの目玉が、僕に焦点を定める。

アイツの口もとが、不自然につり上がった。

世間一般に言われる人の良い人相とは正反対の人相の持ち主。

不意に、あいつの右腕が頭の高さまで持ち上がる。

頭の中で、昔どこかで聞いた様な、ゲームの音楽が、鳴り響いている。

そのアナログな電子音が、本当に笑っちゃうくらい、この場面にミスマッチしていて、

あ、これ、ゲームオーバーの時の音だ、なんだ、でも、全然笑えないな。

なんでだろ？

あいつの平手が、勢いを無視する勢いで僕の頬めがけて急速に落下。

「あつ」

目は瞑らなかつたけど、口からは間抜けな声が勝手に飛び出していた。

怖かったから声を出したんじゃない、アイツの能面に張付いた笑顔が、あまりにも不気味だったからだ。

ボクの視界不良で感覚不良な左頬に鈍い衝撃。

濡れたタオルを、勢い良くコンクリートの壁にぶつけた様な音が、暗く無音だった室内に、空しく響き渡る。

僕は退出したばかりのリビングルームに勢いよく強制送還された。運悪く、テーブルの足に頭をぶつけたのか、後頭部からじわりと僕の感覚神経に痛みが染み込んでいく。

想定外の痛みで顔を一瞬だけ歪めてしまう。

いっそ、このまま頭を両手で抑えて、床の上をのたうち回ってし

みたい。

けど、今は、痛みを噛み締めている場合じゃない。早く立ち上がらないと、もっと、酷い目に遭う。

そう思い、床に手を付き、立ち上がろうとする僕の鳩尾に、間髪入れず、今度は蹴りが叩き込まれる。

「グふう」

家の中だろうと革靴を脱がないあいつの爪先が、鳩尾にめり込み、僕の呼吸は、数秒の間、止まった。

僕は涙を流しながら噎せ返り、無意識に背中を丸めようとするが、あいつの蹴りが再度、腹部にのめり込む。

「ガあ、はあ、は」

腹部を蹴られた衝撃で、肺が圧迫され、やっと吸い込んだ空気が、全て放出される。

息が、出来ない。

苦しい

僕は気管を伸ばす為に、顔を上げようとして、

「がッ！」

顎に重たい衝撃。

一瞬、天井と床の位置が逆転した。

前のめりになっていたはずの体は、顎への反動で、後ろへと吹き飛んでいた。

再び椅子の角へと頭をぶつける。

熱を持った痛みが鼓動を始め、頭の中では意識が上下左右に激しく揺さぶられ、目の前の光景は明滅を繰り返している。

僕は立ち上がろうとしたが、平衡感覚に異常をきたしたのか、上手く立ち上がる事が出来ず、膝は僕の意識を無視して、崩れてしまった。

頭の内容物が、全て溶けてしまったかの様に、僕の意識は曖昧で、空中を彷徨っていた。

アイツは、僕の体を、蹴り続ける。

爪先の硬い部分で、踞った僕の脇腹を、背中を、腕を、頭を、何
度も、何度も、繰り返して、執拗に。

蹴られるたびに、痛みの箇所が、一つずつ、増えていく。
もう、ろくに防ぐ事もできずに、僕は、痛みを只、受け入れるし
かなかった。

最後に、僕の頭を、まるでサッカーボールでも蹴るみたいに、蹴
り飛ばしたアイツは、やっと満足したのか、僕に背を向け、調子の
無い鼻歌を歌いながら、玄関の方へと、歩いて行った。

鼻から、つと、何かが垂れてくる。

鼻水？ 風邪でも、ひいたかな……

「……………」

………… アイツの、不意の、ストレス解消。

もう家に帰ってくる必要もないくせに、突然、思い出した様に、
帰って来る。

何が気に入らないのか……多分、理由なんて、特にないのだろう。
家の中で鉢合わせしただけで、アイツはここまでやる。

そこいらの破落戸よりも、遥かに質が悪い。

今回もいつもの様に身構える事ができたのだが、今日とはことん、
運が悪かった。

鳩尾への一撃と、顎への一撃を、もろに喰らってしまった。

唇にも違和感を感じる。おそらく、出血しているからであろう。

しばらく、フローリングの床に寝そべり、自分の被害状況を認識
しようとしてみる。

腕の感覚、無い。

脚の感覚、無い。

腹部は……………どうやら、骨は、大丈夫、と思う。

口内からの出血、結構多量。

鼻血、垂れ流し。

そして、頭が割れるように、痛む。

あーあ、こいつぁ、なかなか、手ひどくやられたもんだ……

なんだ、僕は、笑いながら、泣いていたのか。

自分が泣きながら壊れた様に笑っている様を想像してみる。

とてつもなく、気持ちが悪くなり、吐き気が込み上げてきた。

目を瞑る。

瞼の裏に、アイツが楽しそうに、僕を殴っている光景が浮かんできた。

瞼を、開く。

さつきより、少し室内は暗くなっていたけど、僕に見える世界は、さつきより、ずっと、赤みを増していた。

「……………アイツは……………僕が……………必ず……………必ず……………」

その先の言葉と、その思いは、今は、心の内に、仕舞っておこう。そして、いつか、僕が消える前に、必ず、引き出そう。

否定的で絶望的な勇氣

クモの巣だらけの内容物を有する脳が幾分かシェイクされ平衡感
覚の欠如した状態で床を這いながら、なんとか階段を上り始める。

階段が上がって、すぐ目の前にあるアイツ（2）の部屋のドアの
隙間からは色とりどりの光がただ漏れしている。どうやら、アイツ
（セカンド）は今日も自分の部屋で自宅警備員の仕事を熱心に続け
ているらしい。

この部屋に気軽に入って「そおんなあに暇ならー代わりに学
校行ってくんない？」と言ってみたいのだが、その一言がアイツ
（二）の精神を崩壊させかねないので、止めておこう。

アイツ（式）が本気で暴れたら、今度こそ僕は頭を吹き飛ばされ
るだろう。

事実、僕は今まで三回程あいつ（煮）に撃たれた事がある。

まあ、運が良いのか、それともあいつ（兎）の腕が悪いのか（多
分後者の方）僕は今までの三回の襲撃の内、まだ一回しか負傷して
いない。え、ここは日本？ 知ってますともそんな事。この国は世
界に誇れる平和で民主な放置国家……… 法治国家である。が、しか
し、そんな理屈はこの家の住人達には通用しないって事が僕にはも
う嫌という程分かってしまっている残念だが。

たく、なんでアイツ（荷）は銃刀法違反で逮捕されないんだか。

警察が早い所、アイツ（？）をしょっぴいてくれる事を切に願う
のが僕の日課であるが。

未だにアイツ（貳）は警察に引き取ってもらえていない。

なんでだろうか？

粗大ゴミだからかな？

警察は未だ、一度も来てくれていない。

あ、そうか、引きこもってるからか。なるほどなるほど。

僕は、アイツ（忒）の仕事を邪魔しない様に、抜き足差し足で三階へと行き、自分の部屋に入室した。

ボクの部屋には机、椅子、ベット、あとゴミ箱位しか家具が無い。ゴミ箱が家具の内に入るのかは、専門家でないのでノーコメント。我ながら実に無味乾燥なインテリアだ。

あまりにもシンプルすぎて逆に居心地が良くくらいである、いやホントに。

バックを机に置き、服を着替える。

部屋の中はむせ返ってもむせ返りきれない程、空気が籠っていて、カビ臭い、尚かつ、どうしようもなく気分を害する、そんな熱気に包まれていた。

そしてボクの気分は幾らむせ返ってもむせ返りきれない程、下限無く最悪であった。

目眩がしていて頭も痛むが、この空気の悪さでは僕が窒息しかねない。

仕方が無いので、渋々、換気をしようとして部屋に一つしかない窓を開けようとした時、思わず硝子に映った自分の顔を見てしまい、さらに追い打ちをかけるように気分がどうしようもなく口オウになったので、あえなく断念。

熱のこもったサウナみたいな室内のフローリングの床に、死んだ野ウサギみたいに生気を感じさせない四肢を投げ出す。

立っているよりかは、冷たいフローリングの床に寝転んでいる方が、幾分か楽だ。

暑苦しいヤツはお高い所がお好きらしく、ホコリっぽい床は嫌いらしい。

仰向けになつたまま、何となく、天井のシミを見つめる。

つい最近発見した、天井のシミ。

虫の様で虫じゃなかった、小さな黒いシミだ。
一点を見つめる分には対して負担はかからない。
薄暗い天井に、窓の外の、いつもより赤みの強い夕焼け空を、空想する。

ぼやける境界線。

眼球に浸透する鮮やかな赤。

まだ、色の識別くらいは、出来る。

傷が疼く。

頭を過る少女の顔。

少女の顔をまじまじと見つめたわけではない。

ただ、あの真つすぐとした瞳が、妙に、印象的だった。

少女と目が合った時、なぜだか、僕の感覚が、一瞬、鈍ったような気がした。

昔は、僕の注意散漫で、思わず他人と目を鉢合わせしてしまった事が、何度もあった。

その度に、他人の冷たい目を見るたびに、僕は、ますます人を拒む様になっていった。

何処に居ても、何をしても、視線が、他人の目が、恐かった。誰も僕の事なんか、気にかけていない。

そんな事は、分かっているし、そうであるのが望ましいって事も、分かっている。

それでも、僕は、恐ろしい。

他人が、他者が、あの無機質な目が、視線が、恐ろしくて、仕方ない。

でも、あいつは、あの少女は……………
他の奴らとは……………

……………いや、止めよう。

この手の話は、無意味だ。

僕は、他人とは、まともに関われない。

近づく事は、出来ないんだ。

僕は、自分を守る事すらできない、惨めな、人間の、成り損ないだ。

今の自分を支えられているかどうかも、怪しい。

どうせ壊すなら、何も感じなくなるくらい、そう、徹底的にやっておけばよかった。

中途半端に残すと、今の僕みたいに、なるから。

あの時、僕に、あと少しだけ、否定的で、絶望的な勇気があれば、僕は………

空想

目覚めると、視界は消し炭の色に埋め尽くされていた。
暗闇と静寂だけの世界。

呼吸をする事さえ忘れてしまいそうになるほど、この世界は、僕
にとって心地がよい。

闇の中に身を置いてみると、気持ちが落ち着く。

この世界で、僕がもっとも安らげる瞬間だ。

すべてが無となり、闇に飲み込まれている。

自分も闇の中にとけ込んでいく様な、そんな錯覚。

深い闇の中に身を置いてみると、自分が自分じゃなくなる様な、
そんな感覚に堕ちている。

自分を、ここじゃない何処か、遠くに、置いてきてしまった様な、
感覚。

こういう時、僕は、いつもどうでもいい事を考えてしまう。

僕の今までの人生、それが全て、すべてが夢だったら。

そうだとしたら、どんなに良い事だろうか。

そう、もう一度目を瞑って、そして、もう一度目を開くと。

そこで、僕の空想は止まる。

その先が、その先の僕の姿が、どうして？

どうしても、思いつかない。

そもそも、全てが夢だったら？

夢を見ていた僕は、果たして、僕なのだろうか？

それは、その人物は、僕と言える存在なのだろうか？

「……………」

止めよう、この手の話も考え出したら切りがない……
それに、もう一度人生をやり直しても、僕は、おそらく、いや、
確実に僕のままだ。

いくらやり直したって、僕は変わる事なんて出来やしない。

「……………」

思考を中断すると、自分が至極空腹だという事に気がついた。

起き上がるのが少々面倒だったが、どうやら僕の腹に無断で違法
滞在しているヤツは空腹にめっぼう弱いようだ。

面倒なヤツだ。

できることなら強制退去させたい。ビザとつくに切れてますよっ
て言って。

関節は少し動かすだけで軋んだ声を上げる。骨は大丈夫なはずだ、
と思うのだが。

無理矢体を動かし、なんとか、起き上がる。

長い間、床に寝ていたせい、体中に鉛玉でも埋め込まれたのか
と疑いたくなるくらい、節々が重たい。

自分の肩を摩りながら、静かに扉を開ける。

廊下も真っ暗だったが、そんな事は当たり前前の事なので抜き足差
し足で階段を下る。

途中、アイツ（仁）の部屋の方を見たが、珍しくドアの隙間から
は不健康そうな光が漏れていなかった。

おそらく、買い出しに行ったのだろう。

アイツ（似）の習性からしても、妥当なタイミングだ。

アイツの書齋に近づくと、大抵ろくな事が無いので、足早にスル
ーしておく。

冷蔵庫にはアルコール類と錠剤、あとタバコ数種類ぐらいしかな
いので、立ち寄らず、玄関の無駄に重厚な扉をそつと開けて、家か
ら脱出する事に成功する。

外の空気は、昼間とは打って代わって、清々しいほどに澄み切っ
ていた。

街頭の周りでは、今にも消え入りそうな乏しい光を求める虫達が、まるで、線香花火の火花の様に、パチパチとその儚い命をぶつけていた。

そんな様子を、ぼんやりと眺めながら、ポケットに手を突っ込み、僕は硬いアスファルトの上を、ゆっくりと歩き始めた。

電車 in the 女子高生

「えー、うつそー、なにそれ？ 信じらんない」

「いや、これマジで本当なんだって」

外の景色に目を移してみたが、窓ガラスに反射した自分の顔が目に入ってしまった、また下を向く。

「え、なになに、それ何の話？」

電車が揺れる。

足下がぐらつき、反射的に吊り革に手を伸ばし、なんとかバランスをとる。

「だからさあ、この前の打ち上げの時にさ、男子がクラスの女子にランク付けてたって話」

連結部分のドアに身を預け、視線を車内へと向ける。

「うわあ、何それえ、そういうのってマジ酷くない？」

車内で他人の迷惑それ上等な大声で話し合ってるのは、どごそのやたらとスカート丈の短い女子高生の集団。

「マジありえないわあ、そんな女子でもやんないって」

「……………？」

「てかさあ、うちのクラスの男子なんて、誰も相手にしてないっつの！」

何故、あの女共は、ドアの近くで、群れているんだ……………もしかして、嫌がらせ？

「だよなー、あんなレベルの低いやつらがそんな事言うとか、まじありえないから」

電車が駅に着いても、床に置いたバックを退かそうともしない。

「でもさー、男子の中で一番かわいいと思われてるのが島津って、

マジありえなくない？」

これでは降りる人にも乗車する人にも迷惑極まりないではないか。
「えー、ソレありえないわー、なんであんな子が一番なわけ？ マジムカつくし」

アリエナイのはお前らだろ、と言える勇氣は、まあ僕にある訳が無い。

「だよー、なんでよりによって島津なのか、マジわけわかんないよー」

車内の人たちは、当たり前のように皆目を下に向け、誰も彼も、彼女達を注意をしようと思わない。こういう態度が日本の若本達を駄目にしてしまうのか、と思い込んでみる。

「ね、マジそう思うでしょ？ あいつさあ、なんか最近また男子に媚びだしたよー」

仕方がないので、目を瞑り、瞼の裏に引きこもる。

「あー分かるー、あのネクラ女、最近また調子乗り始めたよー」
「……………がたん、ごん、が、がが、たん、ご、とん」

「ていうかさあ、島津ってさあ、マジでうざくない？」
「……………腹が、減った。」

「だよー、ていうかあ、あいつさあ、あんだだけ嫌がらせ受けてまだ学校来るとか、マジでどういふ神経してんだろー」

……………空腹……………何を、食べようか？

「また、あいつの教科書、燃やしちやあつか？」
「破るんじゃないくて燃やすか……………よくあるよー……………」

「だめだつてそんなんじゃない。それじゃ足りないっての。今度はさ、体育の時にあいつの制服、燃やしちやおうよ」

それやられた事あります何回か……………耳でも、塞ごうかな……………割と本気で、塞ぎたい。

「うわー、それマジ鬼畜ー」

オーイ、キチクハオマエラダゾー。

「えー、なにそれいいじゃん。マジであいつにはそれくらいやんな

きや。また調子付くとかム力つくし」

目を開ける。

顔を少しだけ上げて、空っぽの女共を見る。

空っぽだと思っていた女共の中には、憎悪が、押し合いへし合い、てんこ盛りだった。

「てかさ、私たちのストレス解消もできて、お金も貰えるって、最高じゃない？」

「アハハ、それ言ってる」

僕の中で、アイツのどす黒い感情が、蜷局を巻いて、渦巻き始める。

「あいつさあ、こんだけ嫌われてるのにさ、まだうちに話しかけてくるとか、まじでウケるよねー」

「ていうかさ、あいつ必死すぎてマジキモいんですけど。マジうざすぎだよ、あいつ」

ああ、この感じ、なんか、抑えられないな。どうしようかな。

「あはは、あいつってさ、まだ私たちの事友達だとか思ってるのかな？」

死なないといけない人間って、いるのかな？

「友達とか言っつて、あいつ、うちの財布だったじゃん」

この感情は、ぶつけてしまった方が、いいのだろうか。

「あはははは、マジでそうだったもんね、あいつマジでつけるよねえ」

他の人間にこんな感情を抱くなんて、僕ってなんて、ロマンチストなんだろうか。

でも、この感情は、心の奥に閉まっておくのが、世間の常識なんだろうか。

良かった、僕は次の駅で電車から降りられる。

電車が、駅に着く。

僕は、ここで、降りるんだ。

僕は、降りる時、すれ違い様に、心の中で、言ってやった。

只、前を向いて、視線を固定して、彼奴らに、

「死ねば？」って心の中で、

……………あれ？

心の中で言おうと思ったけど、つい、口から出てしまった。

僕が降りた直後、すぐにドアが閉まり、電車は前へと進み始める。

「……………」

電車が、遠ざかっていく。

色んな人の、色んな感情を乗せて、遠くに、行ってしまふ。

暫く、電車が遠ざかるのを静かに見守って。

少しだけ湿った、淡い空気を、大きく吸い込んだ。

そうしたら、ほんの少しだけ、気持ちさが、落ち着いた。

それから、僕はまた、歩き始める。

まあ、でも、あれは僕の本心だったから、いいんだろうな。

女、もとい、幼女、いや……少女が正しい。

とりあえず、駅から徒歩3分の地点にある寂れた書店で情報収集に励みながら今後の活動方針について一人脳内議論を行ってみる。

コンビニ弁当は添加物いっぱいだし、ファミレスはなんだかんだ言ってお高くつくし、かといって立ち食い系は足が痛くなるし、何も食べずに断食修行を行うという手段は……貧血に悩まされる身である僕としてはあまりその選択肢は選びたくない、などと一人会議をあれこれだと思いつつ、続けていると、

不意に、後ろから肩を叩かれた。

どーせ、気のせいだろ、と思い当然無視をするが、
今度はやや強めに叩かれた。

二回も間違うとはせっかちなやつだな……まさかこんな所でカツアゲなんて……ないな。

やはり無視を続行するが、また肩を強めに叩かれる。

肩が外れると懸念したボク（貧弱）は、泣く泣く振り返り顔を見ずに「人違いです」と言っつて、視線を雑誌に素早く戻した。

が、僕の努力の甲斐も虚しく、背後の気配は一向に消滅してくれない。

なんか気に障る事したかな？

と少し不安になってきたが、身に覚えが無いのと無駄に会話をしたくないので、無視を続行する。

すると暫くの間、気配は後ろで固まったまま、そのまま停止していたが、

突如、後ろの気配は僕の右側面に移動した。

視界の隅に、確かに感じる、誰かの視線。

誰かが、僕を、見つめている。

僕には、視線の主の行動が、理解出来ない。

なぜ僕のような気持ち悪くて暗い人間にかまおうとするのか、なぜか？

全く理解出来ない。

僕は只そつとしておいてほしいだけなのに、なぜ僕の一人だけのこの一時を邪魔をしようとするのか？ 学校に行ったら行ったでまた動物園の檻の中に閉じ籠まらなければならぬ時間があるのだから、この一時、今だけでも僕を精神的に解放してほしいものだ。

だから、僕は、自分の為に、無視を貫く。

これは男の意地である。

もうこの際だから躍起になり読書に集中しようとする僕。

大人気ないとは言わせないぜ。

そんな僕の気持ちもおかまい無しに、突然、両？に柔らかい何か、触れた。

ま、ましゅまるが……なぜ？

頭の中がましゅまるの出現に理解が及ばなくて、僕はこの状況にただ困惑するしかない。

そして理解する間もなく、次の瞬間、僕の顔が90度右に曲がり、そのまま急速に落下。

人間の、僕の首の骨がゴキンというマンガの様な効果音を立てた。明らかに僕の首の稼働域を無視した行為により凄まじい音が脳内に反響し、まさか自分の首の骨が折れてしまったのではないかと驚いて啞然とする僕の眼前に飛び込んできたのは……切れ目の瞳が印象的な、幼い顔立ちの……女の顔だった。

………女、もとい、幼女……少女が正しい。

少女がボクの腕を掴み、不適な笑みを口元に浮かべた。

なんだ、小学生か、とは口に出せない。

よくエアコンの効いた店内で僕の額に嫌な汗（本日3回目）が滲み出てくる。

単純に、嫌な予感がした。
そしてなんだか死にたくなつた。
そんな、今日この頃（もう夜だけど）。

月とスッポン

少女は最近出来上がったらしい（少女談）見るからに高級そうなマンション住んでいた……妬ましい。

マンションの入り口には警備員が立っており、そこら中に監視カメラが設置されている。

それに加え、マンションの設備とは似つかわしいフィットネスクラブがあるし、バーみたいな場所もあるし、こつ、これがセレブってやつか！ と言えそうなくらいでもはやこれはマンションなのか？ と勘ぐりたくなる。いや実際僕は勘ぐったけど。

おまけか何かは知らないが、少女の部屋は最上階の43階。玄関はオートロックでしかも指紋センサーまで付いていた。

廊下はなぜか大理石だし床には動物の毛皮（虎か？）みたいなモノまで敷かれていたりで壁を見れば見るからに高価そうな絵画が掛けてあつたり終いには天井からはシャンデリアまでぶら下がっている始末。

そんなセレブな空間に月とスッポンな僕は両手にスーパーの袋を握りしめながら足取りおぼつかなく超が付く程の高級空間を恐る恐る歩んでいた。

前方を歩く少女の足取りはバレリーナのように軽やかだ（誇張）。対する僕は悔しいが、周りのやたら高そうな壺やら絵画やらにぶつからない様におっかなびっくりひたすら視界不良な目を凝らす。やたら重量のある両手の袋を、広いリビングルーム内のキッチンスペースに置く。

改めて、自分の存在している空間を見回してみる。

まず目に入るのは180度外のきらびやかな景色を見渡せる圧巻

の大パノラマ。

思わず外に飛び出したくなかったが、現在地点が地上43階だと思
い出し、足がすくみ断念するしかない。次に目に入ったのは60イ
ンチはありそうな巨大な液晶テレビ。両脇には威圧感のあるこれま
た高そうなスピーカーが置いてある。こんなテレビでレディース4
を見たら、ぼ、僕は、どうなるのだろうか？ ていうかこの液晶テ
レビ売ったら幾らくらいになるのだろうか？ こっそり持ち出すの
は、まあどっかの三世なら……無理だな。ああ、そんなロマンの欠
片も無い事しか考えられない自分が恥ずかしい今すぐ死にたい。家
具はどれも僕（自称家具マニア）でも知っている様な高級な欧州メ
ーカー製の物ばかりだ。ただ、リビングの床は大理石ではなく白い
フローリングで心なしか僕の気持ちをスズメの涙ほど落ち着かせて
くれた。フローリングよ、ありがとう。

とまあ、そんなこんなで朝起きたらタクラマカン砂漠のと真ん中
に居ましたという顔をして惚けていると、キッチンの方から、薄い
ピンク色のエプロンを身に付けた少女が「手伝わないの？」と意外
そうな声で聞いてきたので「手伝わない」と当然の如く返事を返し
たら、顔面めがけてスプーン（鉄製）が飛んできたので、命の危険
を感じ渋々少女を手伝う事にした。

キッチンはかなり広くて、あと五人くらい人が来てどんちゃん騒
ぎしても余裕で料理ができそうだった（思っても無い事ですけど）。
「まったくもー、君にはデリカシーってものが皆無なんじゃないの
？ こういう時は女の子のお手伝いするって憲法で決められてるん
だからね？ ここがもしアラビアの世界だったら即刻打ち首獄門だ
よ。という事で、取り合えずその白菜切っというて」

少女が僕に背を向けながらそう指示してきた。

いや、ここはそんなバビロニアな世界じゃないし、そんな法律自
体世界の何処にもおそらく存在すらしないし、多分。

というか後ろ手に包丁向けるのやめてほしいんだけど……。

ここで逆らっても無意味の極みなので「わかった」と小さく返事

を返し、素直に白菜をみじん切りにする。

「それ終わったら、隣りの白ネギとかもお願いね」

「……………」

白ネギをみじん切りにする。

少女はどうやら魚を捌いている様だ。

後ろからだと分かりづらいが、かなり手慣れている様子。

「その白菜も白ネギとかも産地直送の新鮮なやつなんだよ。美味しく切ってあげてね」

美しく切るなんて高度な技術を僕は取得していないので取り合えずみじん切りにでもすれば大抵のものは美味しくなるだろうと多分おそらくそう思う。

「ところで」

肝心な事を聞いていなかった。

「ん、どうしたの？」

「何を、作るのか……聞いてなかった」

野菜をみじん切りにする手を、一旦止める。

「え？ わからないの？ 鍋が出てるでしょ？ で、この食材、季節は夏、ときたらやっぱり寄せ鍋で決まりでしょ？」

夏は曆的にはもう終わっているし、どこらへんが「決まりでしょ」なのかはじっくりお伺いしたい所だが。

鍋料理、みじん切りの野菜……………なんら、問題ないな。

「よし、魚介類はこんなもんかー」

と、こちらに振り向く少女。

小学生のくせにやけに手際が良いじゃないか。

「どれどれ、そっちの進行状況は？ て、なんで？ なんでみじん切り？」

「……………鍋料理の野菜って、みじん切りじゃなかったっけ……………」多分、少女が珍獣を見る様な目つきで僕を凝視する。

そして、少女は何故か、深い溜め息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7255z/>

ねくら

2012年1月11日02時50分発行